

せたがやアーツプレス

SETAGAYA ARTS PRESS



世田谷パブリックアート

ペール・ギュント

ヤン・ジョンウン 浦井健治

管理人

溝端淳平

世田谷美術館分館

向井潤吉アトリエ館／

清川泰次記念ギャラリー／

宮本三郎記念美術館

世田谷文学館

山へ! to the mountains展

生活工房

生活工房20周年記念事業

家電のある生活展

—暮らしのデザインミュージアム2017

音楽事業部

山崎伸子 チェロ・リサイタル

2017.8-12

Vol. 11

公益財団法人 せたがや文化財団

◎ ヤン・ジョンウン

1968年生まれ。韓国の劇団ヨヘンジャ(旅行者)代表。ソウル芸術大学文芸創作科卒業後、94年から2年間、スペイン、日本、インドなどで多国籍の俳優たちとともに活動。96年韓国に戻り、翌年劇団旅行者を旗揚げ。2001年に発表した『椅子』(イヨネスコ作)で一躍脚光を浴びる。以後、伝統と現代を融合し、身体、言語、イメージを多彩に空間に織りなす独自の実験的な演出は常に反響を呼び、世界の演劇界の次代を担うリーダーと言われている。脚色・演出した『真夏の夜の夢』で韓国演劇史上初めて、06年イギリスのバービカン・センター、12年ロンドン・オリンピック記念公演としてシェイクスピア・グローブ座へ招聘されるなど、海外でも活躍。韓国文化観光部長官賞など受賞多数。18年の平昌(ピョンチャン)冬季オリンピックの開・閉会式の総合演出を務める。

◎ 浦井健治 うらい・けんじ

2000年『仮面ライダークガ』で俳優デビュー。その後、舞台へも活動の場を広げ、04年『エリザベト』ルドルフ皇太子役に抜擢され、以降、ミュージカル、ストレートプレイ、映像作品と幅広いジャンルで活躍。菊田一夫演劇賞、読売演劇大賞最優秀男優賞、芸術選奨文部科学大臣演劇部門新人賞など数々の演劇賞を受賞。世田谷パブリックシアター『THE BIG FELLAH ビッグ・フェラー』『トロイラスとクリシダ』のほか、『アルジャーノンに花束を』『ヘンリー六世』三部作、『ベッジ・バード』『リチャード三世』『MWA』『デスノート The Musical』『あわれ彼女は娼婦』『王家の紋章』『ヘンリー四世』などに出演している。

Cover Story カバーストーリー

『ペール・ギュント』 ヤン・ジョンウン×浦井健治

12月、韓国演劇界をリードする演出家ヤン・ジョンウンと日韓合同キャストによって、イプセンの名作『ペール・ギュント』が上演される。母と恋人を故郷に残し、自分探しの壮大な旅に出る青年ペールを演じるのは、数々の舞台で活躍する浦井健治だ。取材当日、対話しながら早くも創作インスピレーションを与え合っていた2人にとって、この注目の日韓文化交流企画は新たな冒険となりそうだ。

——韓国で上演を重ね、2013年に日本で上演された(ヤン・ジョンウン率いる)劇団ヨヘンジャ『ペール・ギュント』は、スケールの大きなめぐ世界とエネルギーッシュな舞台で、演劇ファンの中で大きな話題を呼びました。この新たなカンパニーで同作に挑もうと思った理由を伺えますか?

ヤン いつかまた手掛けたいという気持ちと、どこかでそれを避けている自分がいたのですが、逃れられない運命のようにこの作品をやることになり、気持ちを新たに決意しました。生まれ変わる『ペール・ギュント』を通して、もう一度自分自身を問うチャンスにしたいと思います。この作品は、鏡で自らの姿を見ているようでいて、そこには映っていない裏側の自分に会うような作品なんです。

浦井 映像で拝見したヤンさん演出の『ペール・ギュント』は、「人間はいつだって、新しい人生をスタートできる」という物語が夢と冒険に彩られていて、感動しました。これを演じるために、自分を思いきりさらけ出すことが要求されると思ってます。ペールは冒険心を持つ純粋な人ですが、自己中心的で滑稽なところもあります。男としてはなるべくペールに包んでおいて隠しておきたい部分も見せないと演じられない予感がしますね(笑)。今回の企画は、言葉が違う日韓のスタッフとキャストが同じ目標を掲げて一緒に進んでいくような公演ですから、絶対に新しい表現があると信じて冒險してみたいと思っています。

——(拍手をしながら)浦井さんと私の可能性がぶつかり合い、そこにどんな発見が生まれるか、今こうやってお話ししていくても期待が膨らんできて興奮しますね。浦井さんって、その時に演じている役の影響なのか、会うたびに全く異なる姿を見せてくれる方なんです。前回会った時は慎重で落ちていた方という印象でしたが、今日の彼は随分とお茶目(笑)。この戯曲の冒頭よりもさらに前、母親に甘えている子ども時代のペール・ギュントに会っているような気がします。まさに自分を自覚させてくれる俳優という感覚がして、本当に、会話しているこの瞬間が楽しい。

——先ほどヤンさんがおっしゃった〈鏡の裏側の自分に出会う作品〉という言葉が気になっています。日本で拝見した舞台には、歪



▲ 韓国版『ペール・ギュント』(2009年、12月) ©LG Arts Center & JD Woo

世田谷パブリックシアター 12月6日[水]~24日[日]

開場20周年記念公演 日韓文化交流企画
世田谷パブリックシアター+兵庫県立芸術文化センター
『ペール・ギュント』

原作:ヘンリック・イプセン 演出:ヤン・ジョンウン
出演:浦井健治 趣里 ユン・ダギョン マルシア ほか

一般 S席(1・2階席)8,800円 A席(3階席)5,400円 S席8,600円 友 S席8,300円
U24 高校生以下 一般・プレビュー料金の半額 プレビュー公演:一般 S席(1・2階席)7,300円 A席(3階席)4,400円

9月24日(日)より一般発売 お問い合わせ:劇場チケットセンター 03-5432-1515



12月	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
13:00				●						●				●	●			●	●
14:00		休					休		●	●				●		●			
18:30			●																
19:00	◎		●					●		●									

◎=プレビュー公演



※未就学児入場不可



んだ鏡が登場しましたね。

ヤン ペールはチャレンジ精神旺盛で前向きに取り組んでいるように見えますが、実は正面から向き合わないといけない瞬間、回り道や方向転換をして逃げているんですね。そういう彼の姿こそ、実人生での私たちのリアルな姿かもしれません。加えてペールは、「己が何者なのか」という質問を自分ではなく、却て他人に聞いて続けます。本当の自分とは何か、自分をまともに直視できているか、本当に自分に責任をとっているのか……そういう質問を自分自身に投げつけ、ちゃんと直面しろという比喩として舞台中央の全面に巨大な鏡を据えました。

浦井 僕、学生の頃によく「お前は中途半端だ、ここぞという時にうまく逃げるよな」と言われていたんですね。このことが自分の中ではずーっと心の中に刺さっていたんですけど、ヤンさんのお話を聞いていて、ふと「それって、ペールじゃん」って衝撃を受けました(笑)。今、僕がペールをやる意味っていうのは、あらためて「自分ちゃんと向き合いなさい」というふうに言られているのかなって思うし、何だかすごくグサリときましたね。と同時に、稽古場ではとにかく心をオープンにして挑もう、何でも言おうって思いました。

——ペールの旅と人生に、飛び込む勇気ができましたか。

浦井 そうですね。怖いですけれど(笑)。

ヤン 私も怖いです(笑)。まさにコインの両面みたいに、臆病者とチャレンジャーといった二面性が見て来るお話ですから。それは

私自身の姿だったり、浦井さんの姿だったり、人間の本当の姿だったりするでしょう。この作品のクリエイションを通して、人のさまざまな面を探りたいという気持ちなんです。〈ペール・ギュント〉という名前には〈訪れる予言されていた人〉という意味があるんですよ。私が最初にこの作品を手掛けたのは8年前。この間の自分の変化に向き合うのはもちろん、「浦井健治のペール・ギュント」に出会い、この作品がまた私の中で変化することが非常に楽しみです。

浦井 いろんな舞台に出演させていただいて感じるのは、作品と向き合う時間が長ければ長いほど、解釈が深まっていくということ。ヤンさんが8年間の時間をかけ、再びペールに向かう瞬間に、立ち会えることがすごく嬉しく光栄です。稽古開始が楽しみですね。

[取材・文:川添史子] [撮影:宮川舞子]

Story

ペール・ギュント(浦井健治)は夢見がちな青年。彼の将来を案じる母オーセ(マルシア)をよそに自由奔放な日々を過ごしている。ペールの無垢な魂に惹かれたソールヴェイ(趣里)と結ばれるが、「遠回りをしろ」という闇からの声に導かれるように、海を越え世界を彷徨う。何度も財産を築き、また一文無しになる波瀾万丈の冒険の果てに、やっと故郷を目指すが——。本当の幸せ、眞の自分をどこまでも追い求める、150年経った今も古びない壮大な「自分探し」の物語。

『管理人』——溝端淳平

舞台のみならず、ドラマや映画、バラエティの司会までオールマイティに活躍の場を広げる溝端淳平。今秋挑戦するのは、森新太郎の演出によるイギリスのノーベル文学賞作家、ハロルド・ピンターの代表作『管理人』。世田谷パブリックシアター主催公演初登場の溝端淳平に今の心境を訊いた。

——『管理人』はこれまで溝端さんが出演された作品とタイプが異なります。

台本を読んだ後の最初の感想は「ハードルが高い」です(笑)。話の筋がはっきりとあるわけではない。だからこそ魅力を感じました。僕自身の悩みをストレートに言うと、今まで積み上げてきたことをどう活かせばいいのかわからないというのが正直な気持ちです。どういう役していくか道順を考えるのが、僕にとって基礎の役作りですが、この作品は出演者が「不条理」感をどこかに抱えていないと成立しないし、答えを決めて演じた瞬間にお客様は冷めちゃうような気もする。悩みながら毎回やることが、ある意味正しいのかもしれません。「不条理」というと一見構えてしまいますが、僕たちの日常生活も不条理なことがたくさん起りますし、芝居というものにも答えなんてないですしね。

——森新太郎さんの演出作品に出演されるのは初めてです。

森さんの演出は細やかで、かつ、奥底にマグマを感じます。丁寧に一緒に掘り下げて作る方と聞いているので、森さんの世界観に没頭したいです。演出家が描く『管理人』の世界をまず自分の中に入れてから、台詞を言えたらと思っています。

——この作品は「管理人」に指名された無欲の男が急に「所有」を意識し出す面白さがありますが、溝端さんご自身がお感じになる「所有」という概念と作品についてお聞かせください。

『管理人』という作品からは、その家の主は誰だというようなことが見えてきますよね。僕自身はあまり所有欲がなく、むしろ所有者になってその責任を負いたくないタイプ。どこへ行っても自分が自由でありたい(笑)。日常でも、物は多くなく、物欲もないし物に対する執着心もあまりない。自分の所有物に対しては、死ぬまでの借り物という感覚です。死んだら何も残らないし、物ではなく



く思い出や楽しく暮らす時間にお金を使うタイプです。『管理人』では、僕が演じるミックと忍成修吾さん演じる兄のアストン、そして温水洋一さん演じる老人、この三人のうち誰がその家を支配するかで駆け引きが始まる。それぞれの台詞がどういう意図なのか、嘘なのか、釣るための口実なのか、わからないことが多い作品です。男だけの三人芝居ですが、男は出世欲や他者との関係性に左右されやすい。管理欲、支配欲、独占欲という観点から、想像しながら入って行けるかなと思っているところです。

——三人芝居ということで、一人ひとりの台詞も多いです。ふだん、どのようにして覚えていますか。

台詞はひたすら反復練習で一気に流れを覚えます。骨組みができたら言葉の内付けをしていく。おおまかに覚えて、一回台本を置くことが大事です。記憶は文字を読んでいるときよりもアウトプットするときに記憶されるものなんだと思っています。新幹線やファミレス、ジムでランニングマシンしながらブツブツ覚えたり……見られてますかね?(笑)お風呂に浸かっているときに覚えて、シャンプーするときに声に出すとか。(笑)。

——多岐にわたるお仕事の中で、舞台のお仕事とは?

舞台は、生きている実感を得られる場です。僕が細かい性格のためか毎回感覚的に違います。舞台自体が生き物で、今日できたとしても明日ゼロから全うしなくてはいけない。本番直前、衣裳さんやメイクさんにいつもと違う感じにやってもらったら、それ

だけでドキドキします。右足から出るか左足から出るか、ルーティンを同じようにしないと舞台に出るまで不安になります。舞台に出てからも声がワントーン高く出るだけでも怖い。常に完璧なことはないんです。芝居を追求していくて体調面を完璧に近づける。自分なりの理想を目指して神経を張りつめないと、ダラダラっと崩れてしまう。

『ムサシ』(井上ひさし作、蜷川幸雄演出)のとき、声をからしてボリープの手術をしたんですよ。ステロイドを打ちながら舞台に立っているときがあって、舞台で声が出なくなることがどれだけ怖いことを痛感しました。あんなに辛かったことはありません。『ヴェローナの二紳士』は蜷川さんが稽古初日から本番まで演出してくださった最後の舞台です。今日は気が緩んでいるなと思ったときに「死ね! ヘタクソ! おまえなんかやめちまえ!」と蜷川さんに言われたことを思い出し、舞台に立つ恐怖が未だに残っています。蜷川さんからいただいたものは舞台に向かう姿勢、熱量、演劇の楽しさ、海外で公演をしたことで感じた国境を越える演劇の力。お亡くなりになつたからこそ、あれだけ厳しく教えていただいたことを心に持っていたい。今回の『管理人』でもそういう経験を活かしたいです。

シアタートラムは初めて経験する劇場です。上質な芝居をしている贅沢な劇場という印象があります。舞台とお客様の距離が近いので細やかな心理の変化もより伝わりやすいと思います。森さんの演出でピンターの作品をシアタートラムでできることは恵まれている、という実感があります。考えさせられる部分がたくさんある芝居なので、お客様に何かを持ち帰ってもらいたいですね。

——2007年にデビューされて、今年は10周年です。

ただただ10年間、この仕事を続けることができてよかったです感謝するだけです。もっと先に行こう、明日はもっとよくなろうと積み上げていく。やっぱり長くやっている先輩の凄さを身にしみで感じますよね。誰でも、人生も仕事もうまくいくときといかないときの波があると思うのですが、どんなときも長い目で見たら、今あることはプラスに変えられるはず。そういう意味で言えど、細かいことに一喜一憂はしなくなったかもしれません。それが10年での変化なのかもしれません。ベースに「僕」というものがあってそこから発展させていくやり方しかできないタイプなので、映像で得たことも舞台や司会で活かせるし、司会でゲストの方がお話しされたことも舞台で活かせる。どちらもいいバランスになっています。どの現場でもみなさん命懸けで精一杯やられている方ばかりなので、その方々へのリスペクトがあれば、自然と切り替えられる気がします。現場が好きなんです(笑)。

[撮影:宮川舞子]



profile

○ 溝端淳平 みぞばた・じゅんぺい

2006年、JUNONスーパーイ・コンテストにてグランプリ受賞。翌年、ドラマ『生徒諸君!』で俳優デビュー。以降、テレビ、映画、CMなど幅広く活躍。近年の出演作に、舞台『こんばんは、父さん』『ムサシ』『ヴェローナの二紳士』『レミング』~世界の涯まで連れてって~』『るづば』『ミッドナイト・イン・パリ』~史上最悪の結婚前夜~』、映画『破裏拳ボリマー』『輪違屋糸里~京女たちの幕末』『祈りの幕が下りる時』、ドラマ『わたしをみて』『初恋芸人』『立花登青春手控え1&2』などがある。



シアタートラム 11月26日[日]~12月17日[日]

『管理人』

作:ハロルド・ピンター 翻訳:徐賀世子 演出:森新太郎
出演:溝端淳平 忍成修吾 温水洋一

一般 6,500円 友 6,300円 友 6,000円 U24 高校生以下 一般料金の半額

9月17日[日]より一般発売 お問い合わせ:劇場チケットセンター 03-5432-1515

11月	26	27	28	29	30	12/1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17
日	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休	休	
13:00																						
14:00																						
16:00	●																					
18:00																						
19:00	●																					

※未就学児入場不可

世田谷美術館3つの分館 —弦巻・成城・奥沢の身近なアート空間

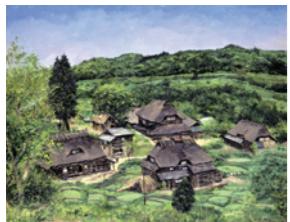
*世田谷美術館(砧公園内)は7月3日から2018年1月12日まで、改修工事のため休館いたします。

世田谷美術館

住居・アトリエを生かした憩いの美術館

世田谷美術館には3つの分館があるのをご存じでしょうか。いずれも世田谷区ゆかりの作家がアトリエ兼住宅として長く使い、亡くなるまでをすごした場所が区に寄贈され、美術館となりました。寄贈された作品は、それぞれ年3回ほどテーマを設けて展示替を行い、紹介しています。床に絵の具のあとが残っていたり、作家が選んだ調度品が置かれていたりと、創作の息吹が残る空間がそのまま美術館として公開されています。

向井潤吉アトリエ館・弦巻



向井潤吉《聚落》1966年
弦巻の閑静な住宅街を歩いていると、片ながれの大きな切妻屋根と蔵が特徴の「向井潤吉アトリエ館」が見えてきます。長い年月、使いこまれて磨かれた、古民家の古材が一部に使われ、そのあたたかみが心をときほぐしてくれます。室内には季節の花や愛用品が飾られて、今もここで誰かが生活しているかのようです。クヌギやコナラが生い茂る庭は、かつてこの地が武藏野の一隅であった頃の面影を伝えています。向井潤吉はこの庭にも愛着があり、「創作の息抜きに、和室から庭を眺めていたそうです」と、同館スタッフの成松里佳さんは語ります。

1933(昭和8)年からここに住み始めた向井は、戦後から古民

▼展示室からの庭の眺め

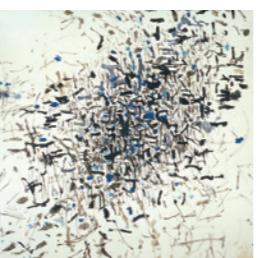


スタッフの成松さん
(館の前庭にて)

のある風景を描くことをライフワークにしました。鹿児島から北海道までを自分の足で訪ね歩き、現場にイーゼルを立て、その地の風光の中で制作を重ねました。

「向井は、戦争で人々の生活が壊されていくのを見てきました。そのため、戦後、経済成長の波の中に消えていく草屋根の民家を惜しみ、愛し、残さなければという使命感を持っていたようです。その思いが伝わっているのでしょうか、かつてあった風景を見たいと、遠方から訪ねてくるお客様も多く、ときには、作品の中に自分にゆかりのある家が描かれている、という方もいらっしゃいます」(成松さん)。

清川泰次記念ギャラリー・成城

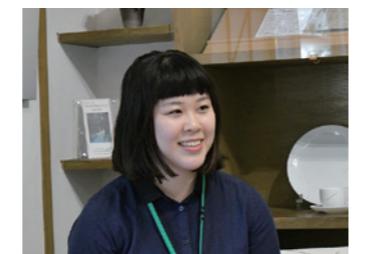


清川泰次《早い夏》1959年

「清川泰次記念ギャラリー」は、戦後まもない時期、まだのどかだった成城に建てられました。アトリエが展示室に、ダイニング・キッチンが事務所・受付と、かつての間取りを生かしたまま、美術館に転用されています。

清川泰次は、具体的なかたちに捉われない抽象絵画を追求し、また、立体作品も制作しました。スタッフの小林由香さんは「作品を順番にたどっていくと、何十年もかけて、清川が世の潮流に流れず、自分の表現を探り、たどり着こうとした強い決意を感じられます」と語っています。

応接間だった部屋は、区民ギャラリーとして週替わりで貸し出されています。「日々、創作活動にいそしんでいる区民の方々の発表の場で、アートを手がかりにし



スタッフの小林さん(小展示室にて)



▲元アトリエだった展示室 床に絵の具のあとが残る



成城学園前駅にほど近い閑静な住宅街にある

て、語らいやつどいが生まれています。グラスや皿などのデザインも手がけ、美を取り入れた生活を提倡していた清川にとって、うれしい情景ではないかと思います」(小林さん)。

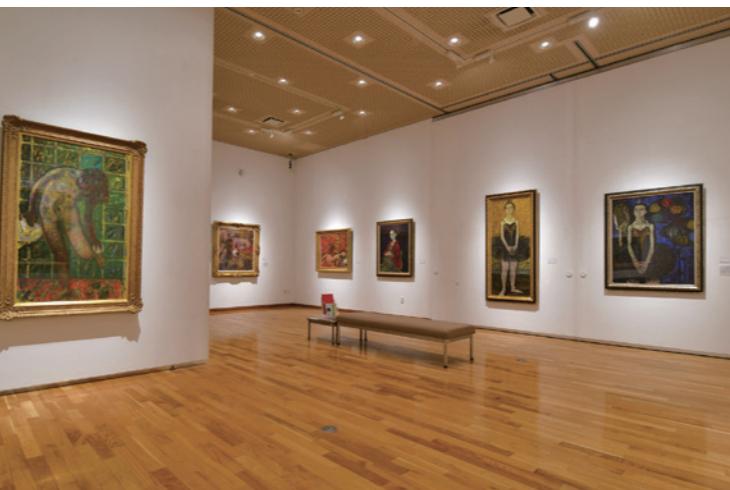
宮本三郎記念美術館・奥沢

カフェやショップで賑わう自由が丘からほど近い奥沢には、「宮本三郎記念美術館」があります。もとのアトリエ兼住居が老朽化し、2004(平成16)年に、世田谷美術館の分館として建て直されていますが、白壁や直線を生かした外観が往時の雰囲気を伝えています。ここは、昭和洋画壇の重鎮のひとり、宮本三郎が1935(昭和10)年から制作の拠点とした場所です。



宮本三郎《鏡前の婦人像》
1945-48年

▼2階展示室 イベント時にはコンサート会場になることも



「宮本は年代によってスタイルが変わり、表現やテクニックを模索し、挑戦を続けた画家といわれています」と、同館スタッフの森まりさん。ここでは多彩な作品、遺品を生かし、さまざまな切り口の展覧会が開かれています。

展示とともに力を入れているのが、芸術を通しての地域とのつながりです。館内に講座室を設け、地元の文化人の講演や、展示とリンクしたワークショップなどを行っています。作品に囲まれた空間で開かれるコンサートでは、「演奏者もお客さまも、他の演奏会にはないイメージの広がりがあり、気持ちが高まるという声をいただいている」(森さん)。



▲ショップには近隣のお店からセレクトした個性的な商品が並ぶ



スタッフの森さん(展示室にて)

3つの美術館は、館全体がひとつの作品と言えるほど、それぞれの画家の個性や方向性が反映されています。同時に共通しているのが、身近な人の家を訪ねているような親しみやすさです。

腰をおろして休める場、飲み物の用意、よく手入れされた植栽など、スタッフのこまやかな心配りがあり、その心地よさから、たびたび訪ねてくる人も多く、「静かでゆっくりできた」という感想が聞かれるそうです。街の中に溶け込んだ小さな美術館には、穏やかな時間が流れています。気軽に足を運んでみてください。

[取材・文：北島章子] [撮影：関口淳吉]

各美術館共通

観覧料：一般200(160)円、高校・大学生150(120)円

65歳以上・小・中学生・障害者の方100(80)円 ほか

※()内には20名以上の団体料金及びせたがやアーツカード割引料金

※ 小・中学生は土・日・祝・休日及び夏休み期間は無料。

※ 各館の住所・電話・ホームページは裏表紙をご参照ください。

開館時間 10~18時(入館は17時30分まで)

休館日 毎週月曜日(ただし祝・休日と重なった場合は開館し、翌平日休館)、展示替期間、年末・年始(12月29日~1月3日)

美術 Schedule

《向井潤吉アトリエ館》 ■ 向井潤吉1960's 民家遍歴

《清川泰次記念ギャラリー》 ■ 清川泰次 季節の情景

《宮本三郎記念美術館》 ■ 宮本三郎の顔・貌 FACES in Saburo Miyamoto's Art

*会期はすべて、8月5日[土]~12月3日[日]

*各館で紹介している作品を上記間に展示 *展示風景は2017年4月1日~7月23日の様子



せたがや芸術美術館

山へ！to the mountains展

開館時間 10時～18時(展覧会入場及びミュージアムショップの営業は17時30分まで)

休館日 毎週月曜日(ただし、祝・休日の場合は開館し、翌平日休館)

世田谷文学館

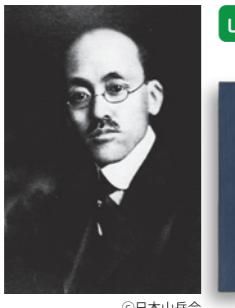
“to the mountains”

ひとは、この言葉に、どれだけの情熱を傾けてきたのでしょうか。

古今東西、人は「山」と共に生きてきました。本展では、『日本百名山』の著者である作家・深田久弥をはじめ、時代を超えて「山」という同じフィールドに情熱を傾けた、写真家や建築家、学者らの業績をご紹介します。この夏、「自分にとっての山(自然)」を探しに行きませんか?

小島烏水 随筆家・登山家

こじま・うすい (1873～1948)
銀行員をしながら、文筆活動を行う。
英國人登山家ウォルター・ウェストンと交流を重ね、歐州で盛んだった近代登山を普及させるために、日本版アルパインクラブである日本山岳会の創設に尽力した。また、浮世絵コレクター・美術批評家でもあり、著書も多数執筆した。



山 × 先駆者



©日本山岳会

田辺和雄 植物学者・登山家

たなべ・かずお (1900～1961)
東京都出身。大正15年に鹿島槍積雪期初登攀を記録。深田とも幾度も山行を共にした。日本高山植物研究の先駆者であった武田久吉に師事、白馬岳、八ヶ岳、尾瀬を中心とした高山植物の研究を行い、『原色高山植物』『山とお花畠(全三巻)』などを世に残した。



山 × 植物



深田久弥 作家・登山家

ふかた・きゅうや (1903～1971)
石川県出身。東京帝国大学在学中より改造社編集部に所属、のちに文筆生活に入る。戦後は登山家として数多くの山岳に登り、「山の作家」として人気を博す。なかでも『日本百名山』はベストセラーとなった。晩年はヒマラヤ関係文献を蒐集し、それらをもとにヒマラヤ紹介に情熱を燃やした。



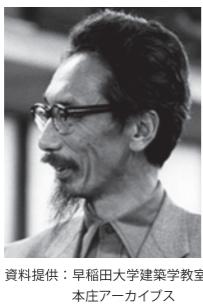
山 × 文学



©望月達夫

吉阪隆正 建築家・冒險家

よしざか・たかまさ (1917～1980)
ル・コルビュジエの弟子のひとりとして、モダニズムの思想を日本に紹介し実践した建築家。大学教授をしながらキリマンジャロ登頂やアラスカ・マッキンリー遠征など、登山や冒險を行った。また、その経験から厳しい環境に耐えうる山の建築を多数手がけた。



山 × 建築

資料提供：早稲田大学建築学教室
本庄アーカイブス

田部井淳子 登山家

たべい・じゅんこ (1939～2016)
1975年世界最高峰エベレストに女性として世界で初めて登頂。1992年には七大陸最高峰登頂者となる(女性世界初)。子育てや仕事で忙しい女性たちにも山に親しんでもらう活動や、登山を通じての東北応援活動「被災した東北の高校生の富士登山」プロジェクトをはじめ、生涯にわたって山の楽しみ方を幅広い世代に伝えた。

山 × 日常



写真提供：タベイ企画

坂本眞一 漫画家

さかもと・しんいち (1972～)
1999年「キース」でデビュー以来、『モートゥルコマンド GUY』、『益荒王』などの作品で人気を博す。2007～2011年「週刊ヤングジャンプ」に連載された『孤高の人』は、新田次郎の小説『孤高の人』を原案に、現代を生きる主人公「加藤文太郎」を創造し、圧倒的な筆力で坂本の「山」を描き出した。本作で文化庁メディア芸術祭優秀賞を受賞。

山 × 漫画



『孤高の人』©坂本眞一 / 集英社

石川直樹 写真家・探検家

いしかわ・なおき (1977～)
2001年、七大陸最高峰登頂を達成。人類学、民俗学などの領域に関心を持ち、辺境から都市まであらゆる場所を旅しながら、作品を発表し続けている。『NEW DIMENSION』、『POLAR』により、日本写真協会新人賞、講談社出版文化賞、『CORONA』により土門拳賞を受賞。著書に、開高健ノンフィクション賞を受賞した『最後の冒険家』ほか多数。

山 × 写真



『国東半島』©石川直樹

百の頂に
百の喜びあり
—深田久弥

資料提供：早稲田大学建築学教室
本庄アーカイブス父・深田久弥が「百名山」を書いた頃、
世田谷・松原の暮らし

深田森太郎

父と母、それに私と弟の一家4人が金沢から世田谷区松原の古い家に引っ越しして来たのは、昭和30年夏の暑い日であった。

この時父・久弥は52歳、以後68歳で茅ヶ岳登山中に倒れるまで、この松原の家をベースキャンプに「百名山」の多くを登り、ヒマラヤやシルクロードなどにも遠征した。

上京当時は、日本隊がマナスル初登頂に成功した後でもあり、また井上靖氏の「氷壁」が新聞に連載され話題を呼ぶ(ちなみにこの作品の中に久弥の訳詩が使われている)など登山ブームのきざしを見せていました。当時の父は、まだ世間からも、また家族からでさえも本業は「作家」だと思われていた。

私の転校した世田谷区立梅ヶ丘中学校では、担任の国語教師がなかなかの文学青年で、

「深田君のお父さんは戦前大活躍した作家です」

と、過去の人のように転生の父を紹介してくれた。

これも戦後、小説らしい小説を発表していないのだからやむを得ないことであろう。

父の再婚相手であった母は、

「久弥は私といっしょになってからちっともいいものを書いてくれない」

と氣をもんでいた。

それでも何か書いてくれないことには家族の糊口を凌げないわけで、松原の家に新潮社や文藝春秋などの編集者が訪れるど、母はいそいそして、

「お父さんに連載の話があるらしいのよ」

などというものだから、私も子供ごろに『小説新潮』の丸山編集長、の名前をわが家の救世主のように覚えてしまった。

しかし、この頃の父は小説への関心を急速になくしていったようで、晩酌で一杯機嫌のときなど、

「お前たち、男女のことなんか小さな事だ。そんなものは早く超越しなければ駄目だ」

と、これから初恋に胸をふくらませている息子たちを煙にまいた。

この家からよく家族登山にも出かけた。当時まだ緑色の車体だった京王線で新宿まで行き、中央線の夜行列車で松本へというコースが多かった。

子供たちに贅沢を戒めた父は、山へ行くときもスキーに行くときも、一家4人混んだ3等車の通路に新聞紙を敷いて座り、しおり遊びなどをしていた。

学究肌の一面があった父は、文献によるヒマラヤ探索にのめり込み、行ったこともないのに、

「ヒマラヤの高峰それぞれの頂の眺望が目に浮かぶ」とも話していた。

父のヒマラヤ文献渉猟が進むほど丸善への支払いがかさんで母が音をあげていた。

このとき買い集めた洋書が父の没後、「九山文庫」としてそつくり国会図書館に収められた。

家のすみずみまで本があふれ、ミカン箱を積み上げた即席本棚の重みで廊下の床が沈んだ。

見かねた母が父の登山旅行中に、近所の大工に頼んで簡素な書庫を庭先に建てた。

これを父が大変気に入り、当初蔵書の収納だけを目的に作った小屋(家族は本小屋と呼んでいた)を「九山山房」と名づけ、ここを書斎にしてしまった。

この「山房」で連日、山好きの編集者や大学山岳部の若者などが集って、明け方まで父を囲んでヒマラヤへの夢を語り、まるで岳人の梁山泊の様相を呈した。

やがて『日本百名山』が読売文学賞を受賞し、父の紹介にも「山の作家」と山が冠せられるようになった。

受賞のお祝に来た評論家の中村光夫叔父(母の実弟)から、「姉さんも苦労したかいがあったね」と言われ涙ぐんでいた母の姿をなつかしく思い出す。

(環白山保護利用管理協会名誉会長・学校法人盛本学園講師)

山へ！to the mountains展

7月15日[土]～9月18日[月・祝] 2階展示室

観覧料：一般800(640)円、65歳以上・高校・大学生600(480)円

中学生以下無料、障害者手帳をお持ちの方400(320)円

* ()内は20名以上の団体割引料金及びせたがやアーツカード割引料金

* 8月11日[金・祝]「山の日」は無料観覧日

関連イベント

●講演会「地学で旅する日本列島の山たち」



8月19日[土]14時～15時 1階文学サロン

「山」の成り立ちや地質について、また「宮沢賢治と山」についてお話しいただきます。

講師：加藤磧一(地質学研究者・宮沢賢治学会理事) 対象：小学生以上・一般 定員：当日先着150名 料金：無料 事前申込不要

●セタブンマーケット2017

9月16日[土]・17日[日]

10時～18時(17日は17時まで)

1階文学サロン

書物との新たな出会いを発信する、本と雑貨の蚤の市。作家・デザイナー・編集者からの特別出品や、子どもも楽しめるコーナーもあります。



※セタブンマーケットについてはP14をご覧ください

文学 Schedule

■コレクション展 ut pictura poesis—詩は絵のように

コレクションにみる文学を彩る書画の魅力 ▶～9月18日[月・祝]

※このほかにも様々なプログラムを行っています。ホームページ、チラシなどをご覧ください。

生活工房20周年記念事業 家電のある生活展 —暮らしのデザインミュージアム2017

生活工房

生活工房で9月18日から開催する「家電のある生活展—暮らしのデザインミュージアム2017」は、わたしたちの未来に向けたライフスタイルを展望すべく、「過去から現在」に至る時代の価値観の変遷を家電製品のデザインを通して探る展覧会です。本展の企画監修をつとめる武正秀治さんに文章を寄せていただきました。

生活工房20周年おめでとうございます。1997年のオープニングイベント「暮らしのミュージアム」展以来、20年ぶりに企画のお手伝いをする機会を得て、まずははじめに思ったことは、「生活工房でしか出来ない展覧会を実現したい」ということです。そのため子どもたちのワークショップやコミュニティキッチンを活用する展覧会を企画しました。「3つの柱」から成るその内容を紹介いたします。

1つ目の柱は「三種の神器と価値観の変遷」です。そもそも三種の神器とは、天皇家に伝わる宝物のことですが、昭和30年代、それに見立てて当時の庶民の憧れだった「白黒テレビ、冷蔵庫、洗濯機」の三種をこう呼んだことからはじまります。当時のひとびとは、家電のある生活を夢見ておりました。所有すること=幸福の実現という価値観だったからです。

ところで今回の展示では、生活シーンの提示に重きを置いております。製品だけではなく、その背後にある時代、時代の生



1997年の展示より

活シーンも重ね合わせてご覧いただきたいと思います。その理由をご説明する前に、デザインについてお話をさせてください。

「デザインとは?」と問われた時、私は「不易流行」という言葉を使ってお答えします。松尾芭蕉が俳諧の極意を表すのに用いた言葉ですが、その意味は、「俳諧とは普遍的な部分と時代とともに変わる価値観から成り立つ」というものです。実はこの言葉、デザインの極意ともぴったり重なります。たとえば、人に関わる機能的な部分である使いやすさやわかりやすさは、変わることのない普遍的な要素であり、時代とともに変化する価値観、つまり流行はデザインに魅力を与える重要な要素なのです。この両者が相まって、デザインが成り立っているわけです。



いわゆる「三種の神器」(1997年の展示より)

製品デザインは「時代の価値観」を写す鏡のような存在です。当時の製品とともに背後にある生活シーンを重ね合わせてご覧いただく理由が、お分かりいただけたでしょうか。懐かしさや珍しさを味わう楽しみだけではありません。家電のある生活シーンを通して時代とともに移ろう価値観をぜひ感じてみてください。

高度成長期、デジタル時代そして現代と、それぞれの時代で三種の神器が登場します。価値を置く対象は物理的なモノからカタチを持たない情報やサービスに移り変わって行きます。

2つ目の柱は、モノにフォーカスしたデザインストーリーの展示です。ここではコミュニティキッチンを有する生活工房らしく炊飯器のデザインを取り上げ、「ご飯をめぐる“美味しい”のデザイン」というテーマを設定しました。

羽釜のシルエットから生まれた初代電気炊飯器。時を重ね最新技術のIHジャー炊飯器が目指すところが、「昔の羽釜や土鍋で炊いたご飯の美味しさ」というのも、興味深い話です。展示期間中には、最新機種の開発者の方をお迎えして、お話をうかがうセミナーも予定しています。

3つ目の柱は未来です。一般的に未来展示というと大企業目線の企画ものが中心で、内容は技術的、経済的な視点が優先さ

れていることが多いようです。そこで、今回は生活工房らしさを全面に押し出し、未来の住人である子どもたちに登場してもらいます。多摩美術大学情報デザイン学科の矢野英樹准教授のご指導のもと、展覧会に先立って、子ども向けのワークショップを行います。子どもたちが楽しみながら、あつらいいでの未来を自由な発想で描き、完成した作品は展覧会で展示発表します。このほか、生活工房が毎年開催している電気自動車を組み立てて試乗する中学生向けワークショップのパネルや、ハイブリッドカーのデザインモデルも未来コーナーでご覧いただきます。

ご紹介した3つの柱は、生活工房が地域とともに歩んで来た20年間の実績と、生活者の目線から生まれた企画といって良いでしょう。家電のある生活と価値観の移り変わりをご自身の身体で感じていただければ幸いです。皆様のご来場を心よりお待ち申し上げます。

[寄稿:武正秀治]

profile

◎ 武正 秀治

たけまさ ひでじ

1957年東京生まれ／プロダクトデザイナー／多摩美術大学教授（生産デザイン学科プロダクトデザイン）／NECデザインセンターを経て現職／ジュエリーデザインコンクール・Gマーク審査員を歴任／著書に『デザインの煎じ葉』（美術出版社）など

初代電気炊飯器
(1997年の展示より)

羽釜

生活工房ギャラリー／ワークショップルーム

家電のある生活展

—暮らしのデザインミュージアム2017

9月18日[月・祝]～10月15日[日]
11時～19時(祝日を除く月曜休み)

入場無料

生活デザイン Schedule

■ にしむらあつこ絵本原画展「ぐぎがさんとふへほさん」

▶ 7月29日[土]～8月27日[日]

■ アートフリマ「つながり展2017」▶ 9月2日[土]～10日[日]

■ クライム・エブリ・マウンテンvol.1「ミャオ族の刺繡と暮らし」展

▶ 11月11日[土]～12月10日[日]

※このほかにも様々なプログラムを行っています。ホームページ、チラシなどをご覧ください。

室内楽シリーズ 山崎伸子 チェロ・リサイタル

国内外のオーケストラとの共演、リサイタル、室内楽はもとより、2007年より10年にわたりチェロ・ソナタ・シリーズなど、まさに第一線で活躍し続けている日本が誇るチェリスト、山崎伸子。この秋、その音楽の豊かさを成城ホールで披露します。

チェリストの山崎伸子は、チェロを「人間の声に近い楽器」という。そして「低音から高音までの音域が広く、チェロだけのアンサンブルでオーケストラのような音が出せます」と。

広島市出身の彼女がチェロと出会ったのは、小学校4年生のときであった。「私が小学校3年生のときに、『子供のための音楽教室』(注：齋藤秀雄、井口基成、吉田秀和らによって創設され、その後、桐朋学園へと発展していった)の広島分室ができて、そこに入って、習い事程度にピアノや音楽の基礎を勉強していました。4年生のときに、チェロ教室が始まり、そこで私もチェロをすることになりました。齋藤秀雄(注：往年の名チェリスト、指揮者)先生の生徒の大学生が毎週東京から教えに来っていました。今から思えば、大学生と言っても、菅野博文さん、原田禎夫さん、藤原真理さん、安田謙一郎さんら錚々たる顔ぶれでした。

その年、齋藤門下生の合宿が宮島であり、まだチェロを始めて4ヶ月だったのですが、齋藤先生から『5年生になつたら東京に来ないか』と言われました。そして、東京に出て、藤原真理さんのお宅に下宿するようになりました」

山崎は、齋藤秀雄の晩年の弟子の一人である。小澤征爾の師としても著名な齋藤のレッスンは、厳しいものであった。「非常に細かく、1曲を通して弾くということはありませんでした。褒められることもありませんでした。明治生まれの先生は、18歳でチェロを始めて、ドイツに留学し、英才教育の必要性を感じ



て、私財を投げうって、桐朋を作られました。日本のクラシックがヨーロッパに追いつけ追い越せという強い思いが伝わってきました。齋藤先生のレッスンは毎週あり、ほかに下見の先生、藤原真理さんら学生のレッスンが週2回ありました。学生に下見をさせる制度は、教えることで学ばせようともされていたんですね。

齋藤先生には、スケールやエチュードなど基礎的なことばかりを徹底的に習いました。メジャーなチェロのレパートリーの勉強をしたのは、世の中にでてからです。齋藤先生の『ソロだけでは音楽家になれない』という考え方で、中学3年生のときに強制的に弦楽四重奏を組されました。ハイドン、ベートーヴェン、シュ

ベルト、バルトークなどの傑作を弾くことができ、チェロを土台とした音楽づくりの勉強もできました。

齋藤先生が亡くなられた後、日本音楽コンクールで第1位になりましたが、そのときベートーヴェンのチェロ・ソナタ第4番を初めて演奏しました。よく分からぬまま弾きましたが、自分で考えないといけないと思うようになりました」

その後、彼女は、ヨーロッパへ留学し、ジュネーヴでフランスを代表する名チェリスト、ピエール・フルニエに師事した。「フルニエ先生は教育者というより演奏家でしたから、目の前で弾いてくださることが、教わることよりも身になりました。1レッスン、2時間で1曲を終わらせていくので、毎週違う曲を持っていかなければならず、早く楽譜を読んで、自分で考えることを教わりました。齋藤先生の場合は、1曲に何か月もかけていました。1小節で10回何か言われるような細かさでした」

10月9日の成城ホールでのリサイタルはピアノの加藤洋之との共演。バッハの《無伴奏チェロ組曲 第2番》、ベートーヴェンの《チェロ・ソナタ 第1番》、ドビュッシーの《チェロ・ソナタ》、リヒャルト・シュトラウスの《チェロ・ソナタ》という凝ったプログラム。「曲目は加藤さんと決めました。バッハの《無伴奏チェロ組曲第2番》は、器楽的というよりはメロディックですね。バッハの音楽はジャズにも編曲されるように、どうにでも弾けます。これで良いというではなく、勉強しているうちにも変わります。だからこそ面白い。今回も、今の私のバッハを聴いてほしいと思います。5年後には変わるかもしれない。ホールの響きや聴衆とともに、その場でしか生まれないバッハをやりたい。

ベートーヴェンの《チェロ・ソナタ第1番》は、初期の作品で、まだピアノがメインで、チェロとピアノは対等ではありません。ベートーヴェン自身がピアノの名手であり、ピアノ・パートが素敵です。

ドビュッシーの《チェロ・ソナタ》は亡くなる5年前の作品。ドビュッシーは体調が悪く、パリは第一次世界大戦によって侵略さ

れている。そのような劣悪な状況のなかで作曲されたからこそ、生きることの素晴らしさが表現されています。特に第1楽章。フランスのしゃれた曲というだけでなく、精神性も表現したい。

リヒャルト・シュトラウスの《チェロ・ソナタ》は、ピアノがものすごく難しいのです。10代最後に書かれたとは思えない、天才ならではのチェロ・ソナタの形式には収まりきらない壮大な作品です。彼は天才ですよね。ピアノ1台でオーケストラを奏でるようで、ピアノには高い技術が求められています。

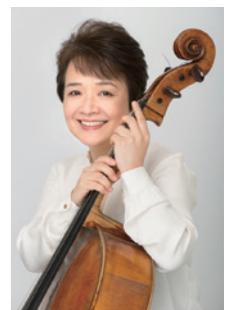
リサイタル全体を通して、いろいろな時代の様式を聴いてほしい。私は、格好をつけないで、正直な演奏を心がけています。そのときの自分をさらけ出す。出し惜しみをすることなく、全部を出します」

[取材・文：山田治生] [撮影：関口淳吉]

profile

◎ 山崎伸子 やまとぎ・のぶこ (チェロ)

桐朋女子高等学校音楽科、同大学音楽学部卒業。齋藤秀雄、レイヌ・フランシ、堤剛、安田謙一郎、藤原真理各氏に師事。第1回民音室内楽コンクール第1位、第44回日本音楽コンクール・チェロ部門第1位。卒業後、文化庁海外派遣研修員として、2年間ジュネーヴでピエール・フルニエに師事。帰国後は日本国内の主要オーケストラとの共演、リサイタル、室内楽のほか、サントリーホール・オープニングシリーズでイギリス室内管との共演はじめ、スイス・ロマンド管や、バンベルク響のソリストに選ばれるなど、活躍を続けている。現在、桐朋学園大学特任教授、東京藝術大学名誉教授。使用楽器はヒエロニムス・アマティ1641年製。



©武藤 章

◎ 加藤洋之 かとう・ひろし (ピアノ)

東京藝術大学附属音楽高校を経て同大学卒業。大学院在学中の1990年にジュネーヴ国際音楽コンクール第3位入賞後、ハンガリー国立リスト音楽院でイシュトヴァン・ラントシ、96年よりケルンでパヴェル・ギリロフに師事。ブルガリア国立放送響、ブダペスト・フィル、ヘルシンボリ響、ハンガリー国立響等と協演、国内外でソリスト、室内楽奏者として活躍な演奏活動を続けている。



Vol. 10

せたがやジュニアオーケストラ(SJO)通信



10月1日[日]のオータムコンサートに向けてSJOメンバーは一生懸命練習し、めきめきと演奏の腕を上げてきています。普段、パート練習を2会場で分かれて行っているため、全員が集まる合奏の時間がとても大切です。60人以上の団員が一つになったときは、やはり圧巻。子どもたちもキャラキラした目で一生懸命、指揮者と譜面をにらめっこしていました。

7月に、オータムコンサートで指揮をして

くださる阿部未来先生と、初めてご対面しました。最初は緊張した様子のメンバーでしたが、阿部先生の優しいご指導で、最後には一丸となって曲を作り上げることができました。メリハリをつけてしっかり集中して取り組む子どもたちの姿に、スタッフも活力をもらいます! 夏休みも練習がありますが、暑さを乗り越えて秋に向かって頑張るメンバーを、どうぞあたたかく見守ってください。

オータムコンサートは、楽しいイベントを



たくさんご用意しています! 団員たちの想いがこもった演奏を、どうぞ楽しみにしてくださいね。

日程・チケット情報は P18

リニューアル
しました

『せたがや音楽通信 vol.8』配布中!

『せたがや音楽通信』は、世田谷区で開催されるコンサートイベントや、音楽活動のための施設等を紹介しています。また、世田谷にゆかりのある音楽家へのインタビュー、コラム等も掲載しています。ぜひご覧ください。

“せたおん”の公演会場や区内施設、店舗等にて無料配布しています。



1月、4月、7月、10月に発行

室内楽シリーズ
山崎伸子 チェロ・リサイタル

10月9日[月・祝] 15時 成城ホール

ピアノ：加藤洋之

曲目：J.S.バッハ《無伴奏チェロ組曲 第2番 二短調 BWV1008》

ベートーヴェン《チェロ・ソナタ 第1番へ長調 op.5-1》

ドビュッシー《チェロ・ソナタ 二短調》

R.シュトラウス《チェロ・ソナタへ長調 op.6》

※曲目は予告なく変更する場合があります。

チケット情報は P18

COMMUNITY PROGRAM コミュニティプログラム

世田谷アートタウン『三茶de大道芸』

ボランティアスタッフ募集中!

世田谷文化生活情報センター(世田谷パブリックシアター／生活工房)がオープンした1997年に、近隣商店街とセンターが協力し「三茶の街を劇場にしよう!」と始まったのが、この『三茶de大道芸』。今や世田谷の秋の風物詩となっています。

商店街や広場など、街のあちこちで行われているパフォーマンスや賑わう屋台など、気軽に出会える“非日常”を通して、たくさんの方に芸術を身近に感じてもらい、三軒茶屋をもっと好きになってもらいたいという願いで開催しています。

そんなフェスティバルの2日間、街中に非日常の不思議な風景をつくり、あたたかい風を吹かせるために活躍しているのが、ボランティアスタッフです。

その活動内容は、ご参加いただく皆さまのアイディア次第で多岐にわたりますが、大きなグループで分けると9月から始まる「ものづくりボランティア」と、フェスティバル当日を支える「当日スタッフ」の2つ。それぞれの活動について、少しご紹介します。

▼手芸班がつくった
リサイクルグッズが並ぶ



▲フェイスペイントを行う
ボランティアさん



▼付き人ボランティアさんが、
パフォーマンスを優しく見守る



▲秋空に映えるかざりつけ



◀ボランティアさんの装飾をパックに、
パフォーマンスが展開される

当日スタッフ

フェスティバル当日の2日間、それぞれの得意を活かして活躍していただきます。パフォーマーの付き人や通訳、パフォーマンス会場のお手伝い、フェイスペイントの描き手、写真撮影などなど。その他、ご参加いただく皆さまからのアイディアもお待ちしています。

毎年、ものづくり～当日まで約100名の方が参加してくださっています。今年は、あなたも一緒にフェスティバルを楽しみませんか?詳細は、世田谷アートタウン『三茶de大道芸』の公式ホームページをご覧ください。

① <http://arttown.jp/>

お問い合わせ・お申込み

世田谷パブリックシアター「アートタウン ボランティア」担当
〒154-0004 世田谷区太子堂4-1-1 キャロットタワー5階
② 03-5432-1526 FAX 03-5432-1559
✉ sancha@setagaya-ac.net



▲かざりつけ班の装飾が、
街にぎわいを与える

世田谷文学館

古書と雑貨の蚤の市 セタブンマーケット

セタブンマーケットは、古書や雑貨のお店が文学館にやってくる“蚤の市”イベントです。毎回のテーマに合わせて個性豊かな店主たちがセレクトした本や、懐かしくて不思議な雑貨・家具・洋服、おいしいフードの販売などを行います。また、活版印刷やネイチャーフラフトといったワークショップもあり、展覧会と合わせてまるまる1日を文学館で楽しめます。マーケットでも特に好評なのが「特別出品」で、編集者の鈴木芳雄さん、作家の吉本ばななさん、角田光代さんなど、文学館と同じ深い作家や編集者、アーティストから蒐集品などを出品いた



だき販売。毎回即完売してしまうほどです。このセタブンマーケットを通じて、本や作家との新たな出会いの場、文学をした「人と人」「人と物」の交流の場になればと企画しています。3年目となる今年は9月16日[土]、17日[日]の2日間、企画展「山へ!展」にあわせ、〈山〉や〈自然〉をテーマに開催します。ご期待ください!



ライブラリー ほんとわ



子どものためのエリア
+
ベビーケア設備



Baby&Kids
Area



ここは「古書店主のお薦めコーナー」

Library
Area

ほんとわ それは 本永久(とわ)—— 時を超えていつまでも読み継がれていく本
ほんとわ それは 本と和 —— 本があることで人が集い、交流する場
ほんとわ それは 本当は —— 本は世の中の「ほんとう」を知りたいときにあるもの
あなたにとての“本とは”何ですか?

※ライブラリーのご利用は無料です。※図書・雑誌の館外貸出は行っていません。
※閉架資料・収蔵資料の閲覧については事前申込が必要な場合もあります。あらかじめお問合せください。

『ABSOLUTE ZERO 絶対零度 2017』

評・吉田純子 [朝日新聞 編集委員]

初演から約20年ぶりという世田谷パブリックシアターでの上演。「絶対零度」という作品が生まれた19年前の「瞬間」と、勅使川原三郎が歩んだ20年という「時間」。その両方をパラレルに見せられているかのような、不思議な浮遊感と感動を覚える1時間半だった。

パリなどで上演を繰り返してきたこの作品は、とてつもないスピードで新作を繰り出し続ける勅使川原の成熟と進化の在り方を、静止画のようにして見せてくれた。初演時は明確に3部に分かれていた世界が濃密に熟し、互いに溶け合い、そして境界のないひと続きの壮大なタペストリーとなつた。わかりやすい物語へと逃避しない、強い矜持を携えて。

この作品には、勅使川原の踊りの三つのエッセンスが凝縮されている。一つ目は、束縛や障害を想起させるメタリックで鋭角的な動き。肉体がシンプルな原子の塊に戻り、「思い」から切り離されて無機的な動きを繰り返す。二つ目は勅使川原の真骨頂ともいえる、肉体の機能すべてを動員するかのような柔軟かつ自由な動き。理屈なく、観る者を圧倒的に魅了する。多彩な質感を掛け合わせる映像と照明が、自由と限界に挑む勅使川原の無心を浮かび上がらせてゆく。そして三つ目、永遠の「静止」が訪れる。

「絶対零度（-273度）」とは、あらゆる生物が生存することが不可能な温度のこと。



2017年6月1日～4日
世田谷パブリックシアター

構成・振付・美術・照明：勅使川原三郎
出演：勅使川原三郎 佐東利穂子



私たちが生きながら体感することは不可能だ。「絶対のゼロ」というあり得ない概念を出発点にした芸術家といえば、やはりこの人、そしてこの作品を思い浮かべずにいられない。ジョン・ケージの「4分33秒」（1952年）だ。

タイトルは、初演したピアニスト、ディヴィッド・チューダーの「演奏時間」が4分33秒だったことから名付けられた。4分33秒=273秒。

一切演奏をしない、舞台上の演奏家。音をつくるという意志を放棄した作曲家。あるがままにそこにある音を聴く、という初心への立ち返り。ケージは最先端の無音室を体験し、自分の中を流れる血流や心臓の音を聞く。生きている以上、まったくの無音に巡りあうことは決してないのだという悟りを「禊ぎ」に、ケージは次なる前衛の時代へとひた走ってゆく。

勅使川原もまた、永遠の矛盾を追うという初心を、この作品を踊るたびに自らに問い合わせ直しているのではないだろうか。終わりや結果が見えることに、大人は挑まない。決して手に入ることのない世界へと手を伸ばし、戯れ続けられる子供の精神を己の中に保ちながら成熟を遂げる。そんな矛盾を引き受ける勅使川原の葛藤を、モーツァルトが晩年に書いたクラリネット協奏曲第2楽章が母なる子宮となって包み込

む。この作品に限らず勅使川原は、バッハ、モーツアルト、ハイドンなどの古典作品をしばしば使う。伝統へと連なるおおらかな胎動の響きを聞きながら、いま一度赤子として生まれ変わろうとするかのように。

絶対的な静止や沈黙へと向かう時に起きる、ほんの少しの波動。シーベルトの最後のソナタのように、すべてが鼓動を止めるその瞬間の無限の直前まで、己の心臓の音に耳を澄ます。そんな覚悟で静止する勅使川原に、観客もまた心を澄ます。そのとき、踊る者と観る者の境界が溶け、観る者ひとりよりもまた、作品に能動的に参加する「踊り手」となる。

[撮影：Akihito Abe]

『子午線の祀り』 永遠の灯

評・長谷部 浩 [演劇評論家]

2017年7月1日～23日
世田谷パブリックシアター

作：木下順二 演出：野村萬斎 音楽：武満徹
出演：野村萬斎 成河 河原崎國太郎
今井朋彦 村田雄浩 若村麻由美 ほか

舞台の前面に大きな円がある。上方から絞られた照明がその中心に灯るろうそこにあたっている。光のみならず、永遠にともり続ける灯火、それはかつては人間で、今は神々となった存在が、住む場所ではないか。

「離れた夜空を見上げると、無数の星々をちりばめた……」知盛を演じる野村萬斎の特徴のある声が響く。萬斎の新演出による木下順二の『子午線の祀り』は、冒頭の場面から雄弁に物語の核心を語り始める。これは壇の浦に散った知盛の亡靈の声ではないか。

一九七九年、宇野重吉の総合演出によって国立小劇場で初演されたこの戯曲は、『夕鶴』とともに木下の代表作である。第一次公演では、萬斎の父、万作が源義経を演じている。九九年の新国立劇場の上演からは、萬斎が平知盛を演じてきた。二〇〇四年、世田谷パブリックシアターの上

演を経て、今回の新演出の舞台となった。『子午線の祀り』は、中世に成立した『平家物語』を原作としている。『平家物語』は、文学であるとともに、琵琶法師によつて歌い、語られ、聴く人の心を激しく揺さぶってきた芸能でもある。これまでの上演では、語りの魅力を能・狂言、歌舞伎、新劇の俳優たちが、それぞれの身体、台詞術を駆使して、木下の純度の高い言葉を舞台に響かせてきた。

今回の萬斎演出の特徴は、言葉を大切にしつつ、視覚的なスペクタクルの楽しみを与えたところにある。この戯曲には、今となっては難解となった「破軍」や「院宣」のような古語が頻出する。古語や「天球」や「地軸」「三八万四四〇〇キロ」といった、自然科学の用語につまずくことなく、観客が全身の感覚を解放して、心を開くための演出がほどこされていた。

もっとも目を見張ったのは、最後の決戦

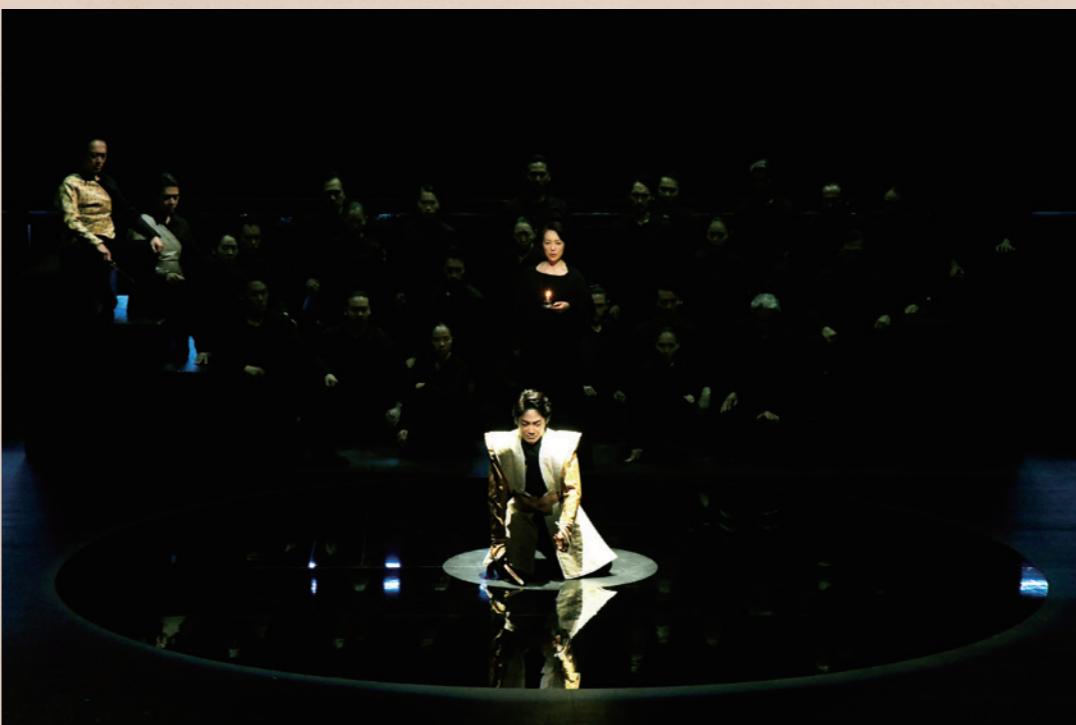
の場面である。第四幕、壇の浦で、平家と源氏の軍勢はそれぞれの軍船に乗つて対峙している。階段を使い知盛を中心とした平家を舞台奥へ、また義経を中心とした源氏を上手側に配置する。成河、河原崎國太郎、今井朋彦、村田雄浩らの充実した演技によって、これまでの幕で性格が鮮明となつた登場人物たちが、離祭りの人形のようにシンメトリックに配置されている。その美しさと存在の強さが眼福であった。そればかりではない。階段ごと舞台を自在に移動させ、平家と源氏が向かい合う。一方で観客席に語られるのではなく、両軍の対決を視覚的に見せている。言葉は力強く発語されて、屹立した身体から空に放たれた。雄渾にして、哀しみを帯びた場面を創り出した。新演出の功績だろう。

若村麻由美が演じる影の内侍は、厳島神社の巫女である。原作『平家物語』でははつきりと描かれていません木下の創作

だった。冒頭の灯は、すでに亡くなった内侍の手によって運ばれたかのように、舞台奥上手にたたずむ内侍に守られている。内侍は亡くなつた後も、観客席の向こう側から、人々を見守つている。幕切れは内侍を演じた女優の語りで閉じられる。

知盛ばかりではない。壇の浦で生き残るうとも、人間は、だれもがいざれば歴史の大海上に沈んでいく。その哀しみがしみ通る舞台であった。

[撮影：細野晋司]





* THEATRE

チック 8月13日[日]~27日[日] シアタートラム

少年2人の思い出の夏には、狂気と切なさがつまっている……。
ドイツ演劇界の大ヒット作、ついに日本初演



柄本時生 篠山輝信 土井ケイト あめくみちこ 大鷹明良



原作 ヴォルフガング・ヘルンドルフ
上演台本 ロベルト・コアル
翻訳・演出 小山ゆうな
出 柄本時生 篠山輝信 土井ケイト あめくみちこ 大鷹明良
一般 6,500円 友 6,300円
友 6,000円 U24 高校生以下 3,250円
親子ペア 8,800円 (前売のみ一般・高校生以下各1枚)
友達割引 6,000円 (前売のみ高校生以下2枚)
9,000円 (前売のみ高校生以下3枚)

	8月	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27
	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月
13:00																
14:00																
16:00	●	休	●	●												
18:00																
19:00			●		○											

『MANSAI』○解体新書 その式拾七』

「古事記」～神々のマジカルミステリーツアー～

8月23日[水]19時 世田谷パブリックシアター

野村萬斎が進行役となり、ゲストとトーク&パフォーマンスを繰り広げる人気シリーズ。今回は学者・三浦佑之と漫画家・こうの史代とともに古事記を紐解きます。



出 野村萬斎
三浦佑之
こうの史代

一般 4,000円 友 3,800円 友 3,500円

U24 高校生以下 2,000円

※未就学児入場不可

チケットの購入方法 (年末年始12/29~1/3除く 年中無休)

世田谷パブリックシアターチケットセンター 世田谷パブリックシアター／シアタートラムと音楽事業部の公演チケットを取り扱っています

電話予約 (10時~19時)
03-5432-1515

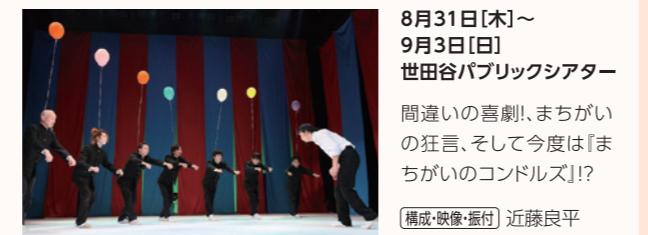
窓口 (10時~19時)
キャロットタワー5階

オンライン
(要事前登録・登録料無料)
(年中無休・24時間対応)

PC → <http://setagaya-pt.jp/>
携帯 → <http://setagaya-pt.jp/m/>

チケット料金はすべて税込
セタガヤーカード会員(前売のみ) 詳しくは [裏面](#)
友 世田谷パブリックシアター友の会会員(前売のみ) 詳しくは [裏面](#)
U24 18歳から24歳対象(要事前登録・前売のみ) 高校生以下 購入時要年齢確認
未就学児 4歳~高校生以下 ※当日要年齢確認
車椅子スペース(定員有り、前日19時までにチケットセンターで要予約)
託児サービス(定員有り、2,000円、3日前の正午までに要予約 03-5432-1526)

せたがやこどもプロジェクト2017 ステージ編

◆『NEVERENDING STORY
～まちがいのコンドルズ～』

8月31日[木]~
9月3日[日] 世田谷パブリックシアター

間違いの喜劇、まちがいの狂言、そして今度は『まちがいのコンドルズ』!?

構成・映像・振付 近藤良平
出 コンドルズ

©HARU

一般 S席5,000円/A席3,000円

友 S席4,700円 友 S席4,500円

U24 4歳~高校生 一般料金の半額 親子ペア券 6,000円

8/31	9/1	2	3
13:00		●	
14:00			●
16:00	●	●	
18:00		●	
19:00	●	●	●

※4歳未満入場不可。
ただし、9月2日13時と9月3日14時の公演は0歳児から入場可能。
未就学児は保護者の同伴が必要

戯曲リーディング「岸 リトラル」より

10月7日[土]18時・8日[日]14時 シアタートラム

『炎 アンサンディ』を含む『約束の血』4部作はここからはじまった――

作 ワジディ・ムワード 翻訳 藤井慎太郎 演出 上村聰史

音楽・演奏 国広和毅 出 岡本健一

一般 2,000円 U24 1,000円 ※未就学児入場不可

9月3日(日)より一般発売

世田谷アートタウン2017関連企画

カンパニー XY『夜はこれから』

10月20日[金]~22日[日] 世田谷パブリックシアター

22名の身体が織りなす、ダイナミックで美しいフランス発の現代サーカス。

演出・振付・出演 カンパニー XY

コレ・ショウ・アーティスト

ロイック・トゥゼ、バレンティン・ムッソ、デビッド・グビッチ

一般 大人4,000円

子ども(4歳~高校生)2,000円

友 大人3,000円 子ども1,500円

U24 2,000円 (7月30日(日)より一般発売)



©Christophe Raynaud de Lage

10月	20	21	22
15:00	●		
19:30		●	●

チケットの購入方法 (年末年始12/29~1/3除く 年中無休)

世田谷パブリックシアターチケットセンター 世田谷パブリックシアター／シアタートラムと音楽事業部の公演チケットを取り扱っています

電話予約 (10時~19時)
03-5432-1515

窓口 (10時~19時)
キャロットタワー5階

オンライン
(要事前登録・登録料無料)
(年中無休・24時間対応)

PC → <http://setagaya-pt.jp/>
携帯 → <http://setagaya-pt.jp/m/>

チケット料金はすべて税込
セタガヤーカード会員(前売のみ) 詳しくは [裏面](#)
友 世田谷パブリックシアター友の会会員(前売のみ) 詳しくは [裏面](#)
U24 18歳から24歳対象(要事前登録・前売のみ) 高校生以下 購入時要年齢確認
未就学児 4歳~高校生以下 ※当日要年齢確認
車椅子スペース(定員有り、前日19時までにチケットセンターで要予約)
託児サービス(定員有り、2,000円、3日前の正午までに要予約 03-5432-1526)

* MUSIC

宮川彬良のせたがや音楽研究所 #8

～来たれ!「劇伴道場」～

9月16日[土]17時 世田谷区民会館



NHK朝の連続テレビ小説『ひよっこ』の音楽で活躍中のアキラ所長が、台本から作られ劇中で使われる音楽=「劇伴(ゲキバン)」をテーマに分析。どのような経過をたどり「ゲキバン」が作られるのか、その仕組みに迫ります!

出 宮川彬良(作曲家)

岡田惠和(『ひよっこ』脚本家)
吉田圭介(INSPI) 引地洋輔(RAG FAIR)
ダイナマイティしゃかりきサーカス
せたがや音楽研究所オーケストラ&合唱団

一般 3,000円 友 2,800円
※未就学児入場不可

茶の湯と音楽1

こどものための茶の湯と邦楽のワークショップ

茶の湯と邦楽を体験しながら、和の文化をたのしもう!

11月26日[日]13時30分 松本記念音楽迎賓館



秋の日曜日、お茶室と音楽ホールのある素敵な場所で、親子で楽しむ和の文化の一歩をお届けします。
お茶の作法の中で聴こえてくるさまざまな音も交えて創作した作品を最後に合奏するワークショップ、邦楽コンサートを。

出 茶道家=吉野亜湖

邦楽演奏家=曰原暢子(箏) 渡部祐子(三味線) 川村葵山(尺八)
曲 地歌「茶音頭」(「筝曲」を除く) ほか(予定)

対象: 小学校4年生から6年生

募集人数: 先着30人(同伴の保護者1名見学可) 参加費: 1,000円
申込: 9月15日[金]受付開始、所定の申込書でFAX(詳細は、9月以降せたおんHPをご覗ください)

Let's Sing ゴスペル! 2017

12月16日[土]15時 世田谷区民会館

一昨年、昨年と大好評を得たゴスペル・ワークショップを今年も実施。「この世田谷から、ゴスペルを通じて歌う喜びを発信!」をキーワードに、成果発表を兼ねたコンサートを開催します。



一般 友 1,500円 ※未就学児入場不可 10月5日[木]より一般発売

参加者募集!

Let's Sing ゴスペル! 2017
ワークショップクワイア

ゴスペルシンガーの第一人者 鶴渕友香氏監修による、発表を目的としたワークショップ(3コース)を実施します。楽器はあなた自身! この世田谷でゴスペルに挑戦してみませんか?

■ 募集期間 8月25日[金]~9月25日[月]

■ ワークショップ

①火曜・夜コース ②木曜・夜コース ③土曜・午前コース
いずれかに参加(全4回)

■ リハーサル 12月15日[金]夕方~夜

■ 本番 12月16日[土]15時開演 世田谷区民会館

■ 参加

友の会ご案内

《友の会》会員募集中 メンバーには盛りだくさんの特典!

■世田谷パブリックシアター友の会
SePT俱楽部

特典

- チケット先行予約・チケット割引
- 会報誌『SePT俱楽部』を毎月送付
- 劇場内ロビーカフェ無料ドリンク券プレゼント
- 企画イベントへのご招待＆ご優待

お問合せ

世田谷パブリックシアター友の会事務局

03-5432-1524

<http://setagaya-pt.jp/club/>

*世田谷美術館(分館は除く)およびレストラン・ル・ジャルダン、SeTaBi Caféは2018年1月12日まで休館しています

■世田谷美術館友の会
FRIENDS OF SETAGAYA ART MUSEUM

特典

- 世田谷美術館・分館の観覧料が、有効期間内何度でも無料
- 実技講座・鑑賞会・美術館巡りなどへの参加
- 会報『世田谷美術館友の会だより』を年3回送付
- 提携美術館の入館割引
- 館内ミュージアムショップの割引

お問合せ 世田谷美術館友の会事務局

03-3416-0607

<http://setabi-tomonokai.jp/>■世田谷文学館友の会
Setagaya Literary Museum Friendship Club

特典

- 友の会独自の講座・文学散歩への参加
- 友の会会報、おしらせ、文学館ニュース、展覧会の案内を送付

お問合せ 世田谷文学館友の会事務局

03-5374-9111

【各館友の会共通の特典】/レストラン・カフェの割引】

世田谷美術館・分館、世田谷文学館観覧料優遇/レストラン・スカイキャット(キャットタワー26F)/レストラン・ル・ジャルダン、SeTaBi Café(世田谷美術館内)

せたがやアーツカード

“世田谷区民限定”区民のみなさまのアート体験を応援する《せたがやアーツカード》▶

15歳以上の区民ならどなたでも登録できます。せたがや文化財団の各施設で割引料金などお得な特典をご用意。もちろん入会金・年会費無料!!

●世田谷パブリックシアター／音楽事業部

▶チケット先行発売・会員割引(一部を除く)

●世田谷美術館・分館／世田谷文学館 ▶観覧料割引(一部を除く)

●生活工房 ▶講座受講料割引(一部を除く)

●メールマガジン毎月配信(ご希望の方のみ)

お問合せ・申込み受付:せたがやアーツカード事務局 キャットタワー5階

03-5432-1548(10時～19時)年末年始を除く

今すぐお申し込みを!

せたがやのアートをみなさまの手で支えていただくために

寄付のお願い

文化・芸術の創造には、すぐれたアーティストの活躍はもちろんですが、それを支える有能なスタッフ、創造活動にふさわしい環境の施設など、ソフトとハードの両面で多大なエネルギーと資金が必要です。より身近に文化・芸術を支え、親しんでいただきたく、みなさまのご支援・ご協力をお願いいたします。

[寄付のお申込みについて]

おいくらからでもご寄付いただけますが、目安として2,000円からとさせていただきます。お申込みの際はお手数ですが、電話またはメールにてご連絡ください。

公益財団法人せたがや文化財団事務局

03-5432-1501

jimukyoku@setagaya-ac.net

当財団へのご寄付は
税法上の優遇措置を受けることができます

個人によるご寄付の場合

確定申告を行うことで、寄付総額から2,000円を差し引いた金額が所得から控除されます。

法人によるご寄付の場合

「一般損金算入限度額」と「特別損金算入限度額」を上限として損金算入することが可能です。

個人住民税

都道府県・区市町村が各自の条例で指定した寄付金が個人住民税の寄付金控除の対象となります。ただし、各区市町村によって取り扱いが異なりますので、詳しくは、お住まいの区市町村にご確認ください。

施設情報

●世田谷文化生活情報センター

〒154-0004 世田谷区太子堂4-1-1 キャットタワー
03-5432-1500(代)

生活工房

03-5432-1543 <http://www.setagaya-ldc.net/>
世田谷パブリックシアター／シアタートラム03-5432-1526 <http://setagaya-pt.jp/>
音楽事業部
03-5432-1535
<http://www.setagayamusic-pd.com/>

●世田谷文学館

〒157-0062 世田谷区南烏山1-10-10
03-5374-9111(代)
<http://www.setabun.or.jp/>

公益財団法人 せたがや文化財団

〒154-0004 東京都世田谷区太子堂 4-1-1
キャットタワー5F
03-5432-1501 03-5432-1559
<http://www.setagaya-bunka.jp/>

●世田谷美術館

〒157-0075 世田谷区砧公園1-2
03-3415-6011(代)
<http://www.setagayaartmuseum.or.jp/>
2018年1月12日まで改修工事のため休館中

●世田谷美術館分館

清川泰次記念ギャラリー
〒157-0066 世田谷区成城2-22-17
03-3416-1202
<http://www.kiyokawataiji-annex.jp/>

●世田谷美術館分館

向井潤吉アトリエ
〒154-0016 世田谷区弦巻2-5-1
03-5450-9581
<http://www.mukaijunkichi-annex.jp/>

●世田谷美術館分館

宮本三郎記念美術館
〒158-0083 世田谷区奥沢5-38-13
03-5483-3836
<http://www.miymotosaburo-annex.jp/>

Setagaya Arts Navigation

“今日、何やってる?”

せたがやアーツナビ 検索

<http://www.setagaya-bunka.jp/>Setagaya Arts Navigation
せたがやアーツナビ

表紙 : ヤン・ジョンウン 浦井健治

[撮影:宮川舞子]

デザイン : 飯岡るみ

編集協力 : ラユニオン・パブリケーションズ

*掲載した情報は2017年7月現在の情報です。

やむを得ない事情などで開催予定、内容などが変更になることがあります。

*本誌に掲載の記事・写真の無断掲載を禁じます。

編集・発行:公益財団法人せたがや文化財団

© Setagaya Arts Foundation. All rights reserved.